

本甲越軍記二編

2258
16



達 13
2258
16

長尾景虎
長尾景春
長尾景虎
長尾景春
長尾景虎
長尾景春

池清

15

甲越



後中甲越軍記二編卷之四
目録

景虎係下遊之遊圖

景虎係下遊之遊圖

景田合津及遊之圖

其内城合戦之圖

其二之圖

其三之圖

長尾景春討死虎之遊圖

長尾景春討死虎之遊圖



繪本甲越軍記二編卷之四

景虎謀逆急難幸

攻

旃

天文十一年四月十一日長尾信濃守高景輔中國千種地が系にて
 新記ありいふ府中の城内を犯し熱傷し勇まをなせるが上
 難をうく越中勢討肉の虚よ系ト付入よ責ある由云ふ
 一六城中の男女上と少人と駿助にまよ下も長尾が一族古志願
 何守秀景長尾平六儀系上田耕前吉房系館田前玄湯系等上
 田依理進系國川羽相摸守系親極尾依源守系を依連石馬丸
 系之と始長尾与力の諸將追々府内に馳聚りて城中の法りく
 城固め教宣に備へるは系主照回常陸分日將監具子思田相系
 守金津伴五郎と始大よ力と得忠勇の士一廿の大吏と勇ま分



繪本甲越軍記二編卷之四

虎東代水門と沼を府内の城廢る圍
 景虎入林泉守幸



虎
千代
色
難
と
遊
園

會本甲戌軍記二卷五



會本甲戌軍記二卷五

馳りまうくの負と活りし... 喜平二家虎... 府内... 津安寺... 其法... 社務... 追人... 後の方... 勢... の... こと...

とあつたまは... 袂縫... 彼... 身... け... 忍... 教... と... 目... と... 次...

繪本相模...

て伯耆の死骸を珍しき物なり我々も亦其の骨を以てせんと
 云捨新志清とたふ老と退きしに討つに馳馬の骨を以て
 殿に付く指し流と申さるるは其の骨を以て殿に付くは其
 才と愛しむまはれが時多し清投あつて景虎討肉の城入り
 兄の養育と清くぞ居りりり

黒田金津及逆の事

去程に之來の城に長尾平六郎後景が及逆急する由討肉の
 城敷浪と打ち進めりるまは屋敷兵庫頭定實長尾時景と
 死く後景討付とて自ら命せり時景若尾と集りて軍儀
 とあり諸城を觸く速く之來の城に取返しとて討死の處を清
 も時景先勢とあつり討肉景虎ハ兄彈正左衛門の母とて

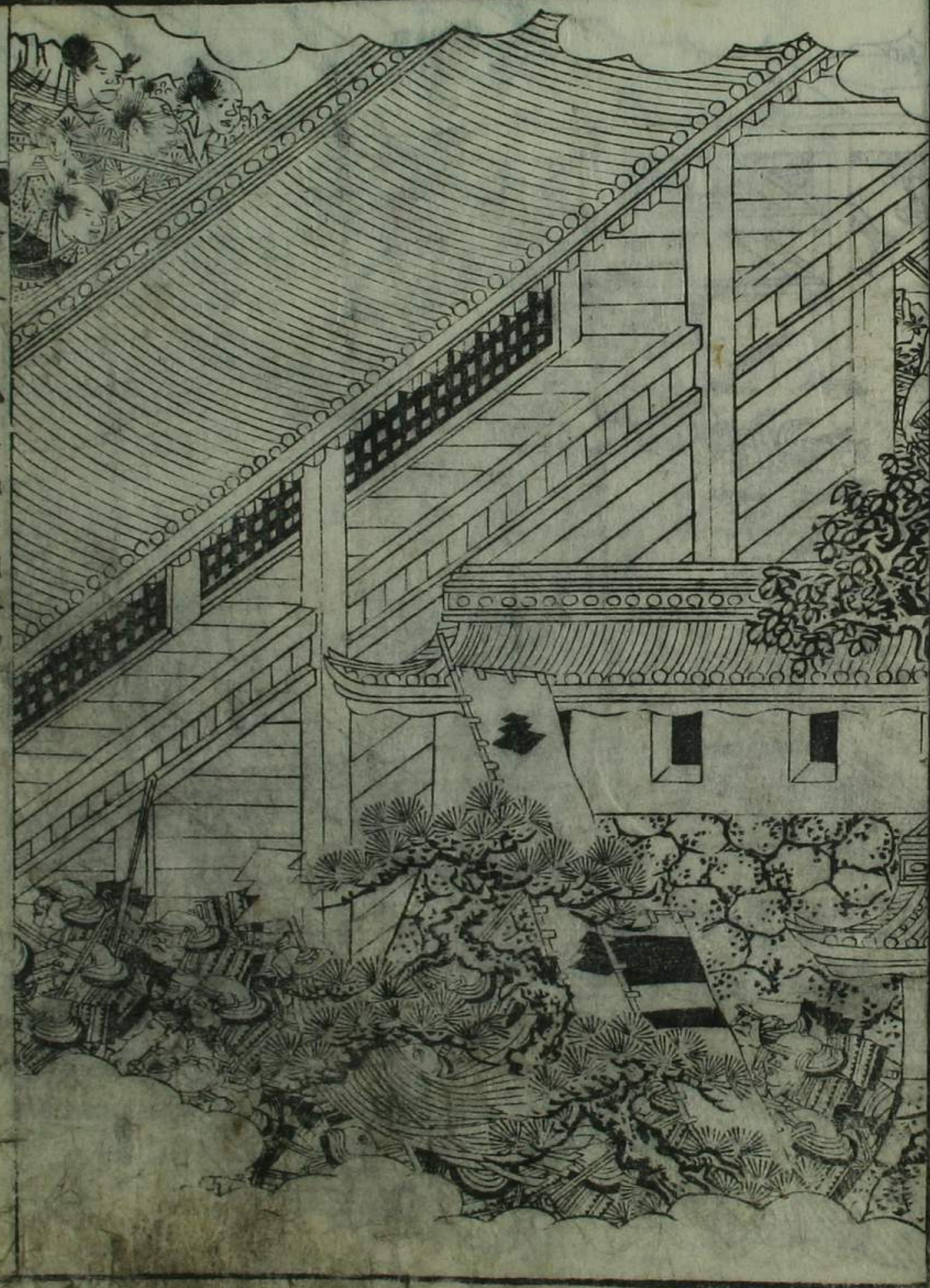
魂

甲越

討肉城の諸士が初時と考けに何と申す人思ひ言事する侍り
 能く素すまは照田親子の侍甚きつて不審一又討死の處を清
 及逆と記しるる頼膳よりいりて沖思意あつて城入り後景
 何と清くもたまはるの事もいひし逆色の城に後付らる討死
 あつて清く討肉の武士と城中より止め用を堅固より一の討死と
 かく照田が初時を伺はせ若不審の事ありて諸備して築營
 か首と切く後之來の所致向ありても速くつていりて清く
 景頭と後景初時をよ人の顔色の苦難と見く送るありて思ひ
 甚難事よりいりていりていりていりていりていりていりて
 何と清くもたまはるの事もいひし逆色の城に後付らる討死
 あつて清く討肉の武士と城中より止め用を堅固より一の討死と
 かく照田が初時を伺はせ若不審の事ありて諸備して築營
 か首と切く後之來の所致向ありても速くつていりて清く
 景頭と後景初時をよ人の顔色の苦難と見く送るありて思ひ
 甚難事よりいりていりていりていりていりていりていりて

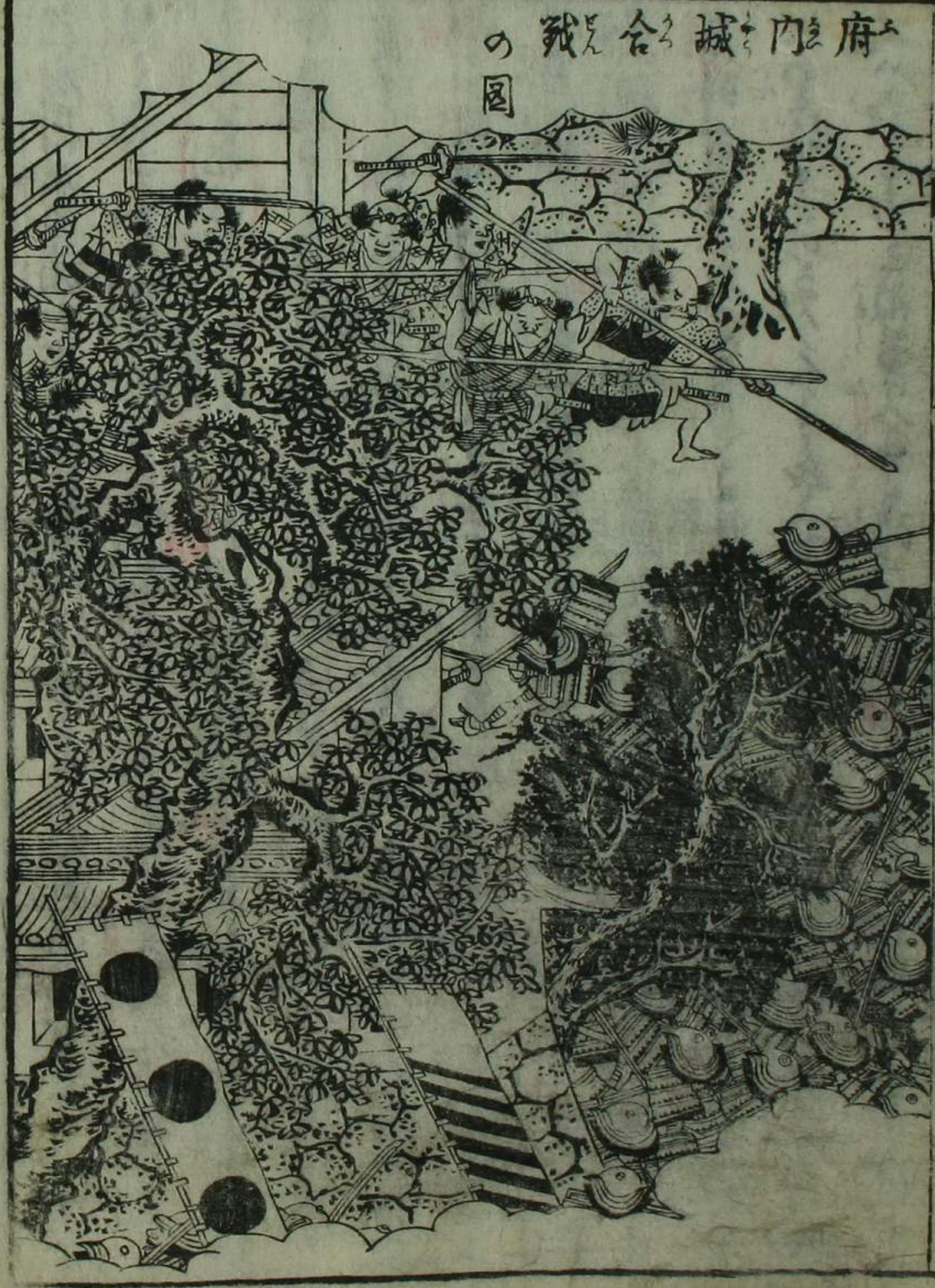
會大甲越軍記二編

繪本甲越軍記二編卷四

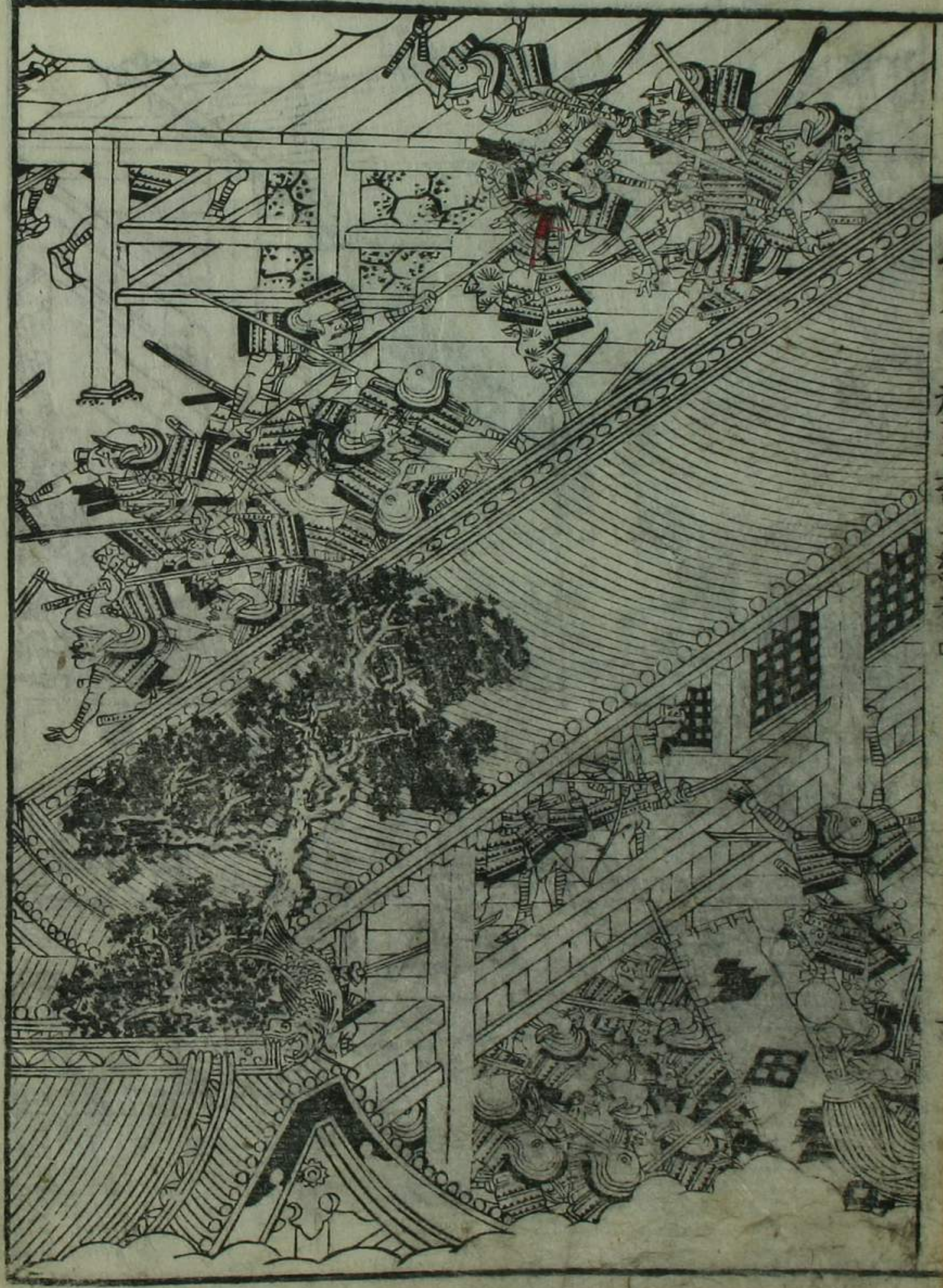


府内城合戦の圖

繪本甲越軍記二編卷四



二具

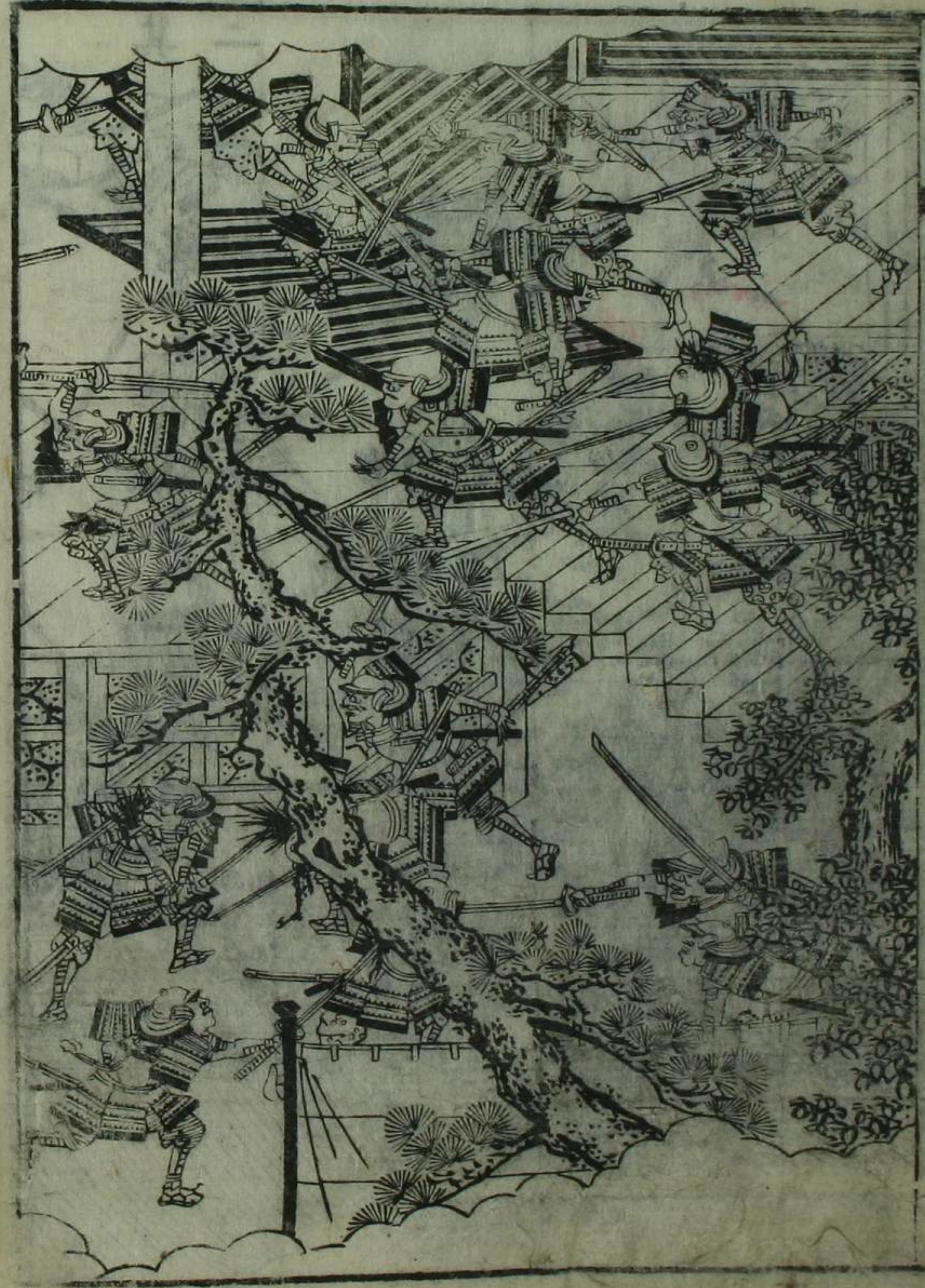


350

187

三真 ツキ

白雲山三真



白雲山三真

喜平三系虎が諫を用ひに府内の將士を遣ひて三系は後向せし
 め其身も後よ後向の目と定めりける押は照回を陰命と云へし
 照回よしく朝倉が推下の將よりか子細育て朝倉英林が勅氣
 更城はへりて病氣を奉ふに大澤介よりあり兄と久之所
 弟と久之所と云其の容貌大驚り上は疾の才ありける意が
 飛せとい奸佞邪智の曲者よとい為業は河津幸人よりける
 源石の病氣も兄弟が官色大驚りるは感て是兄と久之所も
 十嵐が先を八十貫付久之所より頸城郡の内より三千貫の
 成とて威勢日は倍しそ致日は盛なり是より誠後の名泉是田
 長門も金津外記より永正六年後馬場に討死の後泉家の
 家督と照回より久之所と云之所と黒田和泉守國忠と改り幸人の

上は黒田が領と加へ弟久之所と金津伊豆守國忠と改り幸人の
 上は金津が領と倍加へくとも久之所兄弟は風勢と震りて中
 重國と云はるる家と奪人と傳ふは一城城戸を叩く者あり番
 兵強んて咄むまは信士に言く是は方治が殿同國の士は野小
 た番のと云者より見承りて交奉のゆく密にありけり
 一のと云番を巧と幸法は通下を遣はるる津と云ふまは
 門と開くせく雲中と清く互に別後の素を述べ替く時と後
 ね世をく居りて叫く云貴殿の存亡は附あり素と云はるに
 悲びに密に來りて是と云貴殿是と思ふてあり幸法介
 眉と撃め素今月と云く物の思ひあり幸人より宜く是と論し
 の松野猶も席と進めけりは貴殿沖又も風勢朝日の登り

會本日本武藏國上野縣

敵

誰う是と作て其よまき者あらんや是全くお事
 誰の深きよりるるの事とも備けの老臣等貴殿と
 誰の事雙訣の誰う沖又よの醜と食らん種
 人やはまどもぬ京殿存命内准う着をわとそめ
 系殿討死あつて後運た忠の為は長將より
 貴殿と亡さんと思ふその内ははく是當家の老
 助老臣はく己が威は濟る時長尾家の老臣
 踏ぐ是え未諸將高京殿の信成は流るる
 風は怖し一旦其後下に從ふるり今よまき
 揚る將あらん皆上松と沈むわあらんを絶
 幸半よるる一素癩は同長尾平六所殿は

計 旗

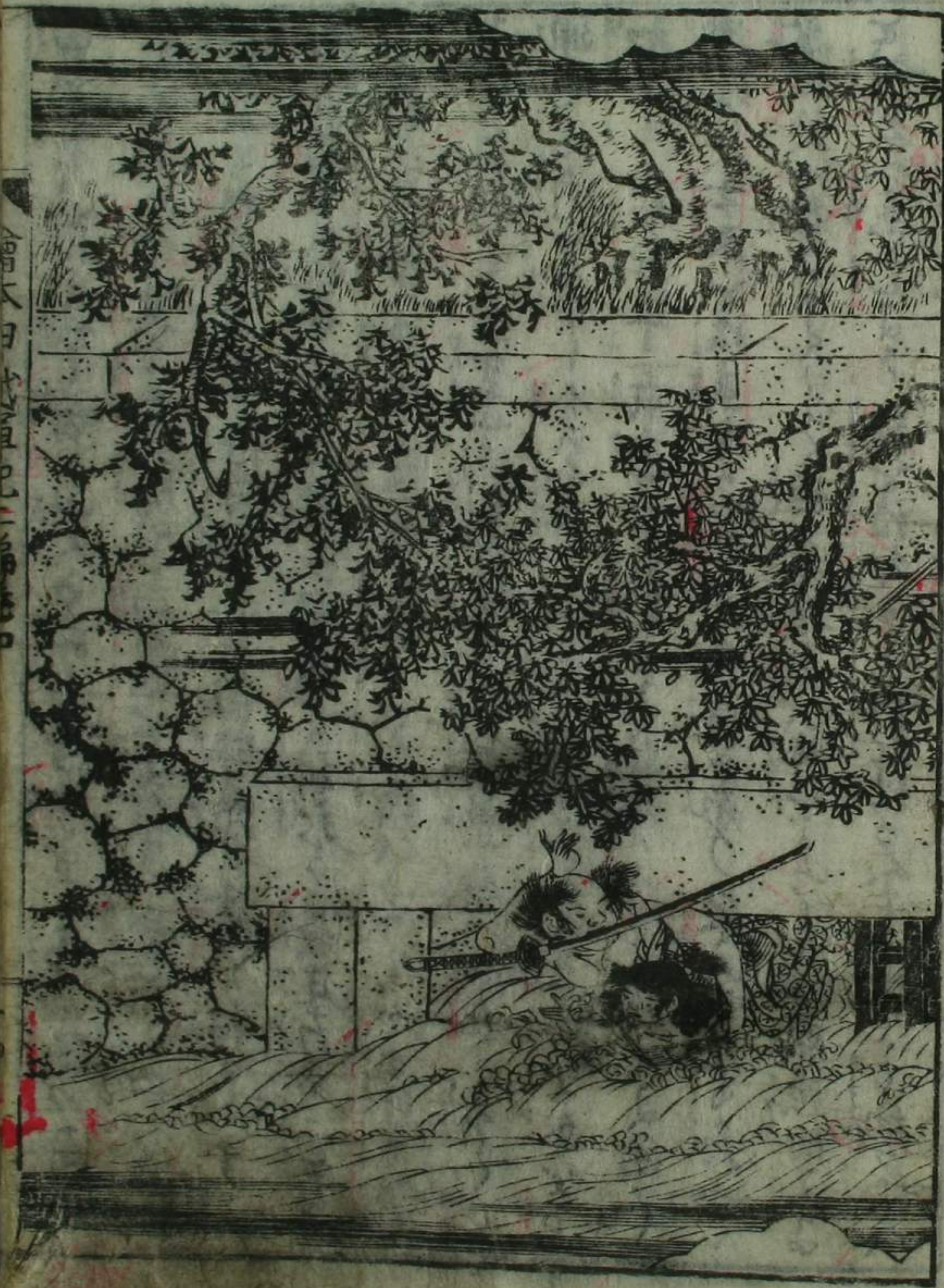
旗

旗と二系は揚るる巷取喧し物の上松の
 先は貴殿の首を見ん事と思つる是貴殿の
 早く心とわくは揚るるま貴殿は從り人者
 救うるは運あらん一ホくは三系を合せ
 抑く貴殿と重んじ誠法圖と二分は割き其
 金の得るる一系は誠中の神保た進進は從
 高京殿の極威より一誠は味取は貴殿神保
 貴殿の後と接しは情中の神保及び誠中の
 々まは元來を懐くは陰分松野が舌頭は心
 諸將味方とあらんは活の作りありと松野
 八条在忠のる支風回河内守早平鹿小文四

曾本日記重臣二編卷四

十一

352



虎城林園

敵

勇と看ひ我と初し雲と叶人ぐ致入り中より高座遠に前敵
依た東門へ今日と一世の致いし向ふ敵と據ひ多く堅持し切若難
拘も双も折るまどくすて早に黒田勢是よ逢く村もくこの敵
知り以竟り松本文書一柳主馬が為り討死を長尾方平二景房
へも勢二十餘人率へて追ひの城門より致ひ入りては青十餘人
と討死すしとく本方より尾長尾平藏景康へ本方より致し
彈正左衛門と致し今公事しと廣嶽の中央より致し士率と下
知りし方前平二景房二十餘人より致し早城の中より油く
沖流し士率と治末も有りしと致し致し今公事しと致し
致しし方前平二景房二十餘人より致し早城の中より油く
と討死すしとく本方より尾長尾平藏景康へ本方より致し
致しし方前平二景房二十餘人より致し早城の中より油く
と討死すしとく本方より尾長尾平藏景康へ本方より致し

新様

軍

敵

軍

黒田が軍師松田長吉が本方の城戸まき責遣勇と修りて討
らんとし長尾勢遠山八浦鈴木本郷八神薬地掃部園平孫六山形
八神上田花彈真田竹尾福富長門夫作源藏下曾孫玄淳と始り
十餘人馳合せく定と敗らましと致し致し致し致し致し
ゆく追うる危し方まき追出せしと勝誇つる勢勢と松田が
指揮烈補長柄の致と先よ之実まきと致し致し致し致し
六神園平孫六上田花彈福富長門下曾孫玄淳等二十餘人討死
松田勢勢ひよ系と城戸と破り我先よと馳入る是と致し
田和泉守八条左衛門が勢神保と致し致し致し致し致し
敵部薬師寺孫六の後部新吉酒匂兵庫五大院元迫官治
尾江並於智尾伏用獲之聖定戸新六左衛門上月司馬神尾角丸

會下日誌三十一日

敵

て防りし素一人城中よへく景虎殿と救ひ出し再び長尾の如く
身一人幸と瀕に下と悔ひては山鬼小治大に救ひ出され
竟の直るは素一人路次の敵と防りてと云々
方と佩き水口より逃げ入敵の虚と伺ひ雅まぐ二の夜に入つて板
浦のちうり景虎と救ひ出して馳出る天京虎と助け多ふにや機
中とちる敵一人も是とあるそのなへ戸舎ゆくりと景虎を小坂に
抱き城より逃入り水門と潜り出んとするを金津が番兵城肉破見
知りしは物言と聞こ己ま一人が手柄とせん相争ふも知れれば
捨と捨り水門と出ると只一突と防りて戸舎同早く是とある
より足と踏立躍り出ると番兵より追取のべく突ある捨る物
と掴む力に任せて引くりし番兵と己より逃るは

359 敵 槽

入るゆへ戸舎より逃げ番兵が首打落し潜龍の海とあるがどり
也と踏揚ておつと出ると防りて士景虎が是とあることと云ふ
好ひまを返り引とるりけ物言と同くおや城中の番兵を引り曲
者ありし験と云ふは旧人の勇士と云ふは景虎と云ふは遠く
落る直りへくと善提の林泉寺よ入りおとるまは備徒等の方丈
に居集り當寺の長尾家仲のま提助より恩返しとあるは
且頼の六率力の限り若君と守護し奉るべしと云ふは
當寺の女氏直と知るは必定軍兵と云ふは
者人をもとる各社と云ふは是と防りては
よ村にびびり速く其用をせしやと云ふは
津安寺の僧の西堂は林泉寺よありし進出で衆僧

津安寺の僧の西堂は林泉寺よありし進出で衆僧

